島津氏と禅宗寺院

～室町時代を対象に～

山家浩樹

只今ご紹介に預かりました山家でございます。今日は、島津氏あるいはその支配した地域と、中央との距離感といった話をさせていただきたいと思っています。

幕末から明治にかけて、新しい日本を作るため、島津氏をはじめこの地域の色々な方々が活躍された背景には、中央だけを見るのではなく、周辺にいて客観的な立場で世界情勢を把握するという姿勢があったのだろうと思います。その姿勢は幕末維新期にできたのではなく、伝統的に培われてきたものと想像されます。

島津氏は、南北朝から室町時代にかけて、中央との関係をどのように構築するか、試行錯誤を重ねていました。今日は、禅宗を対象に取り上げながら、室町時代に、島津氏を中心としたこの地域が、この時期の中央である京都の幕府などと、どういう関係を結んでいくのか、その微妙な距離の取り方を話題にしたいというのが趣旨でございます。

具体的には、この地域の禅宗寺院三箇寺を取り上げます。曹洞宗の福昌寺、臨済宗の広済寺、感応寺という三箇寺になります。

一年ほど前に、「室町幕府と禅宗寺院」という題で話をさせていただきました（講演録は『黎明館調査研究報告』三〇所収）。禅宗寺院のなかでも臨済宗寺院について、室町幕府がどのように統制していったかという話でした。その最後に、鹿児島県内にある臨済宗寺院がどのように位置づけられていたか、十刹や諸山という寺格となっていた県域の寺院をご紹介しました。その際、十刹・諸山として活動が顕著なお寺とそうでないお寺とがあるようだと気がつきまして、顕著でない寺院の場合、十刹・諸山という寺格を持っているにも関わらずそれをあまり活用していないのはどうしてなのだろうと疑問に思いました。その辺りを少し検討してみたいというのが本日の具体的な課題となります。

一　室町幕府の臨済宗寺院統制　～　前回の確認その一

前提として、前回のおさらいのようなことをお話させていただきます。まず、室町幕府による臨済宗の寺院および僧侶の統制について。五山―十刹―諸山という三階層で把握しています。

トップにいる五山には、京都のお寺と鎌倉のお寺、合わせて十一が認定されています。勿論五山なので本来は五つなのですが、鎌倉に五つ、京都に五つで、京都では南禅寺が五山の上として別格になりますので六つになっていまして、合わせて十一が五山です。その下に十刹です。刹とはお寺のことですので、元来は十のお寺という意味です。こちらも数としては十にとどまらず、数多い寺院が認定されていて、地域も京都・鎌倉に限らず全国の寺院が認定されていきます。その下に国別に諸山と

いうお寺が認定されています。

これら五山から諸山の寺院については、幕府が長官である住持を任命するという決まりになっています。その任命書のことを公帖、あるいは公文といいます。住持は先任者の弟子に継承されていくイメージがありますけれども、幕府が任命するので、住持が交代する際、必ずしもお弟子さんが任命されるとは限りません。その結果、一つの法流に偏ることなく、様々な法流の方が住持となります、これを十方住持と言い、五山以下の禅宗寺院の大きな特徴になっています。

僧侶の階層も、五山以下の寺院の階層に対応しています。一定の修行を経たのち、僧侶集団のトップ、前堂首座（しゅそ）となると、住持と問答する試験があり、それに合格すると諸山の住持になります。諸山の住持を経て十刹の住持になり、その経験を経て五山の住持になることができます。

ただこれらはあくまで大原則で、そこから外れることもあります。一つは、特定の法流に偏らない十方住持を原則にしながらも、実際には特定の法流の師匠から弟子へと住持を継承する五山等も出てきます。徒弟院（つちえん）と言います。有名なのは五山の東福寺、京都の南東にある紅葉で有名なお寺ですが、この寺は最初から徒弟院のままです。

もう一つは、住持に任命された寺院に実際には赴かないという事態が出てきます。つまり、五山などの住持に任命されるのだけれども、書面上だけの住持ということです。これを坐公文、「ざくもん」とか「いなりくもん」と言います。

坐公文について、従来は、京都や鎌倉の寺院で修行して、地方の諸山に任命されたときに、地方へは行かないという解釈でいました。最近は、むしろ地方、各地域を中心に活動していて、階梯が上がっていき、京都や鎌倉の諸山・十刹の住持に任命されるときに、地方にいたまま中央に行かないことも考えるべきで、むしろそのほうが多いのではないかと言われるようになってきました。

臨済宗では、五山以下の秩序の下にある五山派寺院・五山派僧のほか、その秩序に入らない寺院や僧侶もおり、林下と呼ばれています。例えば京都ならば大徳寺や妙心寺などです。そのほかに曹洞宗の寺院や僧侶があります。そこで、禅宗寺院や禅僧は、三つのグループに分かれることになります。

ただし、それぞれ完全に独立しているのではなく、おのおのの禅僧は相互に交流をしています。林下や曹洞宗の僧侶も、室町幕府将軍をはじめ中央政権と関わっていないわけではありません。また、禅僧一般に、他の宗派との繋がりも顕著で、禅宗の僧侶であると同時に、密教の修行を行い、密教僧としての側面を持っている方もおりますし、念仏に興味を持っている方もいます。案外に、他宗派との境界線、垣根は低いと考えていただければと思っています。

二　鹿児島県の十刹・諸山　～　前回の確認その二

さて、鹿児島県に即すとどうか。五山―十刹―諸山のうち、鹿児島県では十刹・諸山に認定された寺院があります。簡単には、「扶桑五山記」などに見える、五山以下のリストに載せられています。ただいつできたリストかは残念ながらよくわかりませんので、詳細を知るには他の史料も参照しなくてはなりません。

十刹に認定されているのは、日向志布志の大慈寺です。大慈寺は今

もございますので行かれた方がいらっしゃるかもしれません。もう一つは大隅の正興寺（霧島市隼人町）。今は跡しかありませんけども、市指定の史跡になっています。正興寺は先のリストにはありませんが、他に明確な証拠があります。

諸山は四箇寺です。大隅安国寺は、現存しています（姶良市加治木町）。薩摩広済寺は、今は墓石のみ（日置市伊集院町）。今日は広済寺を多く話題にします。薩摩大願寺も今はないですが、墓石が残っていて県指定の史跡になっています（さつま町）。そして、薩摩野田の感応寺、今も活動されている寺院です。おおよそ、交通の要衝とみなされる場所に存立しています。

前回、十刹・諸山としての活動が顕著な寺院として取り上げたのは、大慈寺と大願寺でした。この二つの寺院は、十刹や諸山に認定された時期がおおよそわかっていて、その時々の政治情勢の中に置くと、認定の説明が付きます。つまり然るべき理由があるタイミングで十刹や諸山になります。各寺院の関係者が、幕府から諸山・十刹という寺格をもらった方がよいと思った時に申請し、認可されたということです。そして、認定後も十刹あるいは諸山としての活動が顕著です。

活動が顕著かどうか判断する材料として、二つ掲げてみました。一つは「蔭涼軒日録」（活字本は『増補続史料大成』など）という、一五世紀の中頃の、幕府の中心にいた禅僧の日記で、十刹や諸山の住持として誰を任命するかということも記録されています。そこに大慈寺や大願寺はしばしば見えます。ただ、広済寺と感応寺は見えません。

もう一つは、「鹿苑院公文帳」（活字本は『史料纂集』）という一六世紀の住持任命書の台帳といった史料です。そこにもやはり大願寺や大慈寺、さらには正興寺もみえます。しかし、「蔭涼軒日録」に見えなかった広済寺、感応寺はこちらにも見えません。

広済寺、感応寺については、幕府が住持を任命していないのではないか、ひいては諸山として活動をあまりしていないのではないか、という疑問が起こります。その理由を探るためには、単にこの二つの寺院を検討するのではなく、島津氏との関係という視点から考えてはどうだろうか、その際に曹洞宗にまで範囲を広げたらどうだろうか、と考えています。いよいよ本題に入ります。

三　福昌寺

三―一　福昌寺について

先程も申し上げましたように今日は福昌寺と広済寺と感応寺の話をさせていただきます。

まず、福昌寺です。福昌寺は、今は立派な墓地が残っているだけですけども、この地域の曹洞宗寺院としてはもっとも中心的な寺院でした。創建は応永元（一三九四）年、南北朝が合一した直後の時期です。島津元久が建立しました。元久は奥州家ですが島津家七代となっている方です。

於福昌寺定条々

右、当寺元久執建申意趣者、自先祖忠久致元久七代、三ヶ国（七）寺（於）一所不持候間、福昌寺就執建申所定也、

一　開山石屋和尚相請尊意（天）、御弟子可有相続事

一　於寺家元久如何程母雖有大分寄進、不可有違乱事
一　於寺家諸御公事不可相懸事
一　代々仁寺領於可寄進事、多少者主可為計、
一　寺家置手、元久所定置、少母背者不可為子孫也、

応永四年四月九日　　藤原元久（花押）

（「旧記雑録」、『鹿児島県史料』所収）

福昌寺は、お寺はなくなっていますので、伝来史料は、現物としては少しだけしか残っていません。しかし、写では「旧記雑録」など、さまざまに残っています。この史料は、応永四年、福昌寺が出来てから三年経った後に創建者の島津元久が作成した定書です。このお寺はこのように運営していきますという内容です。

最初のところ、島津の初代忠久から自分まで薩摩・大隅・日向三箇国に島津氏として寺を持っていないので、今回福昌寺を建てるのだと元久は言っています。次の行、開山である石屋真梁和尚の弟子がこのお寺を相承するとあります。

つまり、建立の動機としては、島津氏の菩提寺が今までないこと、開山は曹洞宗の石屋真梁で、弟子が相続すべきこと、さきほど紹介した徒弟院の寺であって、十方住持の寺ではないと宣言していることになります。住持には島津氏一族が多くなっています。

こののち、福昌寺は島津氏の菩提寺として存続します。六代から二八代斉彬までの墓があります。戦国期にザビエルが住持の忍室とこのお寺で問答したというのが一番有名な事蹟かもしれません。残念ながら廃仏毀釈の中で廃寺になって、現在は立派な墓地だけが残り、鹿児島市立鹿児島玉龍中学校・鹿児島玉龍高等学校になっています。名跡を継いだ寺院が、薩摩川内市に建立されています。

まとめますと、曹洞宗の福昌寺は島津氏の当主が建てた寺である、開山石屋真梁の弟子が住持を継承する、となります。

ここで少し筋から離れて、福昌寺について二つほどトピック的に話をしたいと思います。

一つは島津氏財産の保管の機能です。元久は金・銭・唐物・武具などを、運送業を営む廻船業者に預け置いていましたが、彼らに対し、自分が死んだあと、福昌寺に預けなさい、と命じています（応永四年四月九日元久書下、「旧記雑録」、以下典拠同じ）。廻船業者は日向志布志などにいました。元久は同様に、鹿児島城の蔵に置いてあった銭以下についても、蔵の管理業者に対し、死後に福昌寺に預けるように命じています（応永九年九月十一日元久書状）。

このように命令した理由として、おおよそ次の二つくらいが考えられます。福昌寺ができたのは南北朝が合一した頃で、南九州でも政情が少し安定してきた時期になります。戦時体制からそうではない体制に少しずつ変わっていく時期です。運搬が容易なように港に財宝や武具を置いておく、あるいは最後の守りになるであろう城の倉庫に置いておく、そのような必要は低くなり、むしろ管理のために一ヶ所に集中することが大切になってきていると想像されます。

もう一つ、志布志の廻船業者や鹿児島城の倉庫業者は特権商人であり、併せて金融業なども展開する人びとと思われます。倉庫業を営みながら、預かった金銭を元手に高利貸を行うことも可能となるためです。

一方で、禅宗寺院の一つの特徴として、財産の保管とか資金運用といった経済活動を盛んに行うことがあります。例えば荘園の経営の実務は、室町時代になると禅僧たちが担うようになります。それまでは現地の有力者が地域性を活かして行っていましたが、財力や経営能力のある禅僧が、荘園から収入を得る公家や武家などに、契約内容に従って定額を支払うようになります。契約する側からすると安定的に一定の収入を得られる、現地管理を担う禅僧はうまく経営すると支払い以上に収入が見込まれるという構図です。そこで、特権的な商人たちから権利を剥奪して、島津氏の下にある禅僧たちに自分たちの財産管理をさせ、より運用を図ったという可能性も考えられます。

福昌寺についてもう一つのトピック、旦過についてです。元久は、福昌寺の同集庵という塔頭を旦過所として設定しています（応永十一年正月十一日元久・久豊寄進状）。旦過とは、元々は全国を行脚するお坊さんが福昌寺に来たときに一時的に滞在するという意味ですが、罪を犯した人がそこへ逃げ込むと罪が免除されるという、治外法権の場所の意味にも転化していくといわれています。実際に福昌寺には、戦国時代になってから罪人が逃げ込むということが起きて、それを処罰するかどうかでもめるという事件が起きています。福昌寺の場合、早い段階から旦過寮として逃げ込む場所になっている可能性があるので、注目されています。以上二点、本筋からは外れましたが、福昌寺の文書の中で面白い話題としてご紹介しました。

三―二　開山石屋真梁

元に戻り、福昌寺の開山である石屋真梁についてみていきます。

石屋については「東海瓊華集」（『五山文学新集』二所収）の中に「玉竜山福昌禅寺開山石屋禅師塔銘并叙」という史料があり、伝記は詳しくわかります。亡くなって十一年くらい、石屋を祀るお堂に掲げるためにできた史料ですので、伝記として信頼度の高い史料です。内容を紹介しましょう。

曹洞宗のお坊さんである石屋は、七九歳まで生きられました。出自は島津氏の一族である伊集院氏で、伊集院忠国の子供です。忠国の娘は島津氏久（元久父）に嫁いでいますので、石屋は姻戚で島津元久の叔父にあたります。最初、臨済宗の広済寺に入って勉強を始め、京都に上って南禅寺の蒙山智明という人に付いて正式に得度します。その後京都で、五山派の臨済宗の師匠たちに付いて勉強しますが、二七歳の時に、丹後久世渡（天橋立付近）、筑前志賀島で吉祥天像（文殊菩薩）に感得して「福玉」二字を得るという特異な体験をします。それが影響したのか、その後曹洞宗の師匠たちに学ぶようになります。

まずは通幻寂霊のもとで曹洞宗を勉強しますが、一貫して曹洞宗だったわけではなく、臨済宗の大拙祖能という、関東にいた方の下でも勉強しています。ついで、能登の総持寺という曹洞宗の中心的な寺院で、通幻寂霊の正式なお弟子さんとなって曹洞宗の僧侶として身を立てます。つまり臨済宗の勉強もしましたが、曹洞宗の法流を継ぎます。

明徳元（一三九〇）年、四六歳になって、島津大道（伊集院久氏）という、伊集院忠国の子供が妙円寺の開山に請じます。それを受けて、翌年、石屋は出身地である薩摩に帰ります。薩摩に戻ったあと、島津元久が福昌寺を創建して、その開山に迎えられることになります。石屋は、その後六四歳で能登の総持寺の住持となるなど、曹洞宗僧としての然るべき経

歴を経た後、七九歳で亡くなっています。この方の事蹟としては、長門・周防といった山口県辺りを中心に、山陽・山陰地方で多くの寺院を開創しており、この事蹟も大事ですが、今日は省略します。

石屋の塔銘は臨済宗の惟肖得巌という方が書いており、臨済宗の僧が曹洞宗の僧のために作った文章です。依頼した石屋の弟子、竹居正猷の塔銘もまた、のちに臨済宗の僧が作成しており、曹洞宗僧と臨済宗僧の垣根が低いということの例証ともなります。

四　広済寺

では次に広済寺の話です。臨済宗広済寺の檀那は、島津氏の庶流である伊集院氏です。江戸時代にまとめられたと思われる「伊集院由緒記」には、広済寺歴代の住持が記されています。禅宗史の大家である玉村竹二さんが作った『五山禅林宗派図』（思文閣出版、一九八五年）によると、これら住持たちの多くは、師弟関係で繋がっています。いまのところその根拠は確認できていませんが、広済寺は、住持が師弟関係で継承される、徒弟院であったと思われます。

広済寺の初期の歴史は、やや複雑です。「伊集院由緒記」は、開山として蒙山智明、石屋真梁が最初に参じた方です、続けて「創建」として南仲景周をあげています。「旧記雑録」には、広済寺にかつて伝来した文書（広済寺文書）が引用されていますが、そのなかに、正長二（一四二九）年、当時の住持らが書いた置文があり、そこには広済寺の開創時の歴史が少し異なる内容で記されています（正長二年八月二十二日伊集院熙久・桃隠崇悟置文）。開山は円福寺開山である息山という方で、円福寺から円勝寺を経て広済寺になったとあります。他の広済寺文書には、たしかに円福寺や円勝寺がみえます。また、伊集院忠国が開基というべき立場に位置付けられています。

先に「創建」と紹介した南仲景周は、伊集院氏の系図（『鹿児島県史料』所収）に依れば伊集院忠国の子供にみえます。石屋真梁の兄弟だということがわかります。広済寺文書での広済寺という名称の初見は応安六（一三七三）年で、その史料に、時の住持は南仲景周とあります。ただし、表現は「景周蔵主」となっています。本来は蔵主の身分ではまだ諸山の住持はできませんので、注目されます。

庚午春、南仲座元、試筆有偈、山中玉昆金友、競和之、今及乎帰郷、求序、予従而和、以為序云、

泰定山頭大導師、新年仏法挙揚時、炉中古栢烟含碧、劫外曇華春在枝、瑞鳳紵看伝紫詔、霊神有感託青詞、諸公撃節倶酬唱、胸次波瀾不見涯、南仲座元、庚午元正、有試筆之偈、諸公和之、今借其韻、奉餞関西之行云、

海上仙山飛錫帰、天宮説法夢回時、秋風白髪三千丈、晩節黄花一両枝、万寿送行無好句、諸公撃節有筆詞、雖然後会之張本、再面難期生有涯、

この史料は、天祥一麟の詩文集「龍涎集」（『五山文学新集』別巻二所収）に収められた詩です。明徳元（一三九〇）年正月に、南仲座元という人が京都から帰郷するにあたって、餞別に詠まれたものです。座元とは前堂首座を指すので、南仲は、次に諸山住持になる、諸山住持の準備ができている段階だとわかります。詩に「泰定山」とみえますが、これは広

済寺の山号ですので、南仲が帰郷するのは広済寺の住持になるためだろうと思われます。

明徳元年頃、京都に修行に来ていた南仲は、諸山の住持としての資格を得て、薩摩に戻って広済寺の正式な住持になったのだろうと想像されます。整理すると、南仲は、まず蔵主の立場で実質的な住持となり、その後、京都へ上って改めて修行して正式な資格を得た後、現地へ戻って正式な住持になったとみなされます。

この詩を作った天祥一麟は、ときに京都万寿寺住持で、かつて薩摩へ下って諸山の一つである大願寺に住持した経験があります。薩摩との縁のもと、薩摩の人を受け入れて更に現地に送り返したのかもしれません。

広済寺文書には、住持任命で面白い史料があります。

嶋津御庄薩摩国泰定山広済禅寺住持職事、早任先例、可被執務之状如件、

長禄三年十月二日　　陸奥守判

崇薫首座

（「旧記雑録」）

時代は下がって長禄四（一四六〇）年のもので、島津氏の当主、奥州家の島津忠国が住持の任命書を出しています。諸山の住持任命では、通常、幕府から将軍署判の公帖が発給されるため、島津氏が直接に住持を任命する文書を出すというのは異例です。玉村竹二さんも、この文書を「公帖考」という論文で、特異な例として紹介されています。

以上、広済寺については、南仲景周が、現地で実際に住持になった後に京都で修行して、戻ってきて正式な住持になったと思われること、島津氏が住持任命書を出していること、ともに通常とは異なる事象が確認されます。

五　感応寺

次に感応寺を取り上げます。感応寺の歴史は非常に古く、栄西を開山として鎌倉の初頭に創建され、鎌倉時代の末、元亨三（一三二三）年に四代島津忠宗により再興されます。再興の時の中興開山は雲山祖興という方です。嘉吉二（一四四二）年頃に焼失し、その後復興します。初代から五代までのお墓があるのはよく知られています。

今のご本尊十一面千手観音は、文安元（一四四四）年に作られたもので、感応寺の焼失後に復興のために作られた像です。院隆という方の作です。院隆は、他にも作例が残っており、愛知県瑞泉寺の無因宗因像や、大報恩寺（千本釈迦堂）の傅大士及二童子像が院隆の作だとわかっています。間違いなく中央で活躍していた作家が感応寺のご本尊を作成しており、当然京都との関係が垣間見えます。その後一五世紀の末には、中興開山雲山祖興の画像が作られます。その賛文に、雲山と室町幕府の初代将軍である足利尊氏が詩の応酬をした、という事蹟が書かれており、ここでも中央との繋がりを持とうという意識が見えます。

このように京都との関係が見える一方で、先程触れたように、中央の記録類には諸山としての活動が顕著に見えないのは不思議です。広済寺と同様に、感応寺の住持任命について検討してみます。感応寺には「旧

記雑録」などに文書の写しが多く残っていますが、感応寺の住持に任命される任命書はあまり残っていません。

一つが明応五年（一四九六）十月二十九日のもので、細かい検討を要しますが、幕府の任命書とみなしておきたいと思います。もう一つは、少し時代は下がるのですが、天文九年（一五四〇）のもので、薩州家なのですけども当主的な立場にあった島津実久が出したもの。ここでも島津氏の任命書が出ています。室町幕府は、むしろこの時期に公帖を盛んに出しており、島津氏が出しているのは特異な例となります。

寺の由来を書いた「感応寺由来」を見ると、明応五年に住持に任命された用堂従亀という方、天文九年の南華従薫という方、いずれも島津氏出身の方とわかります。感応寺の歴代のなかで島津氏出身はこの二人だけです。この二通が感応寺の任命書として数少ない実例となっているのは、島津氏出身者が任命されたことと関連しているかもしれません。いずれにせよ、島津氏が住持任命書を出しているのは、先程の広済寺と一緒で、特異な例です。

六　まとめ

お話ししてきた曹洞宗の福昌寺、それから臨済宗の広済寺・感応寺の三箇寺について、まとめるとこのような表になります。まず開基、これは檀那となって創建した人物です。福昌寺は島津元久とはっきりしています。元久は七代目で、福昌寺には六代目以降のお墓があります。臨済宗諸山の広済寺、こちらの開基は伊集院忠国、島津氏一族で、檀那は伊集院氏で継承されていきます。同じく臨済宗諸山の感応寺は、四代島津忠宗が再興します。そのため五代までのお墓があります。伊集院氏も島津氏の中に入れてしまえば開基は全部島津氏です。島津氏の歴代の墓があることからも、島津氏ととても関係が深い寺であるとお分かりいただけるかと思います。

	曹洞宗	臨済宗（諸山）	
	福昌寺	広済寺	感応寺
開基	島津元久７ ６代以降の墓	伊集院忠国	島津忠宗４再興 ５代までの墓
「開山」出自	伊集院忠国子	伊集院忠国子	？
住持弟子相承 （島津氏出身住持）	○ （有）	○？ （伊集院氏有）	△？ （有）
島津氏住持補任	―	例あり	例一応あり

次に開山です。福昌寺は石屋真梁で伊集院忠国の子供、広済寺の実質的な開山である南仲景周もまた、忠国の子であり、広い意味で言えば島津氏の一族です。石屋真梁と南仲景周は兄弟である上に、六代氏久の

夫人は二人のお姉さんか妹なので、島津当主と近い姻戚関係にあることになります。感応寺の中興開山雲山祖興の出自はよくわかっていません。

それから住持が弟子に相承されていく徒弟院であるかどうか。曹洞宗の場合は基本的には弟子に相承されていきますので、福昌寺は徒弟院です。広済寺は、先に紹介した玉村竹二さんの業績によると、住持が弟子の間で相承されていることは確かなようです。感応寺についてはよくわからないのですが、「感応寺由来」にみえる歴代住持の名前をみると、初めの頃は雲山祖興の「祖」という字が三字目に使われることが多くなっています。禅僧の名前の三字目は、師匠によって決まる場合が多いため、三字目が共通するのは、同じ法流に属する可能性が高いとみなされます。そこで、歴代の最初の頃は、師匠から弟子へと相承されていたのではないかと思われます。しかし、確実ではありませんので、「△」にしてあります。

それから島津氏出身の方がどれくらい入っているかについては、福昌寺には元久の子供が入っていたりします。伊集院氏も広済寺にたくさん入っていますし、感応寺にも島津氏が二人ほど入っています。次に、島津氏が住持を任命する立場にあったかどうかについては、曹洞宗ではそのようなことはあまりしませんので、棒線を引いております。広済寺では、一例だけですが島津氏の任命例が確認できました。感応寺も、やや特殊な事例かもしれませんがあります。

この表を大胆にまとめてしまうと、曹洞宗・臨済宗に関わりなく、島津氏が創建し、島津氏出身の僧を開山とし、その弟子に住持を相承し、島津氏自身が住持を任命する、ということになります。

これらの寺院の禅僧は、この地域に拠点を置いたことになります。おそらく、先程広済寺の場面で触れたように、地域で修行をして、必要に応じて京都や鎌倉でも修行をするが、また戻ってきてこの地域で弟子を育てる、さらに場合によっては名前だけ中央の有名な寺の住持になる、このように活動していたと想定されます。

さらに臨済宗である広済寺・感応寺だけでまとめます。諸山の普通のパターンは、諸山であることを利用して幕府との関係を求める、つまり諸山に認定してもらって幕府との繋がりを強くしていく、そのため幕府から住持を次々に任命してもらう、となります。ところが広済寺や感応寺は、諸山に認定されて幕府との関係は維持しているものの、諸山であることを積極的に利用はしていません。

感応寺でいえば、お寺が焼けて復興する時には恐らく京都との繋がりを使っており、場合によっては幕府からの公帖をもらっていますが、それ以外の場面で京都との繋がりが見えないので、必要な時だけ繋がりを利用しているように思われます。住持は地域で、自分たちで決めていく、ただし、必要な時だけ幕府から任命してもらうこともある、例えば、島津氏出身の人で将軍の任命書が欲しい場合には要求する、などです。つまり、諸山あるいは十刹という寺格を保持し、時にそれを利用するけれども、日常的にそれを活用することはせず、自らの範囲内で処理していきます。

結論としては、この三箇寺にみえる姿勢は、島津氏の対幕府の距離感を如実に反映しているのではないかと思います。いうなれば付かず離れずです。禅宗における中央との対峙の仕方に、島津氏の中央に対する基本的な姿勢が垣間見えている、というのが今日の話の結論ということになります。

長くなりましたが以上で終わらせていただきます。ありがとうございました。

〔おもな参考文献〕

鈴木泰山『禅宗の地方発展』畝傍書房　一九四二年

小林準道「石屋」『道元思想のあゆみ』二、吉川弘文館　一九九三年

廣瀬良弘「戦国期の禅宗寺院と地域権力」『戦国大名から将軍権力へ』吉川弘文館　二〇〇〇年

玉村竹二『日本禅宗史論集』思文閣出版　上、下之一、下之二　一九七六～八一年

斎藤夏来『禅宗官寺制度の研究』吉川弘文館　二〇〇三年

斎藤夏来『五山僧がつなぐ列島史―足利政権期の宗教と政治』名古屋大学出版会　二〇一八年

五味克夫「野田感応寺の史料について」『鹿大史学』二八　一九八〇年

新名一仁『室町期島津氏領国の政治構造』戎光祥出版　二〇一五年

福岡市美術館図録『悟りの美―西国曹洞宗寺院の什宝展』二〇〇二年

黎明館図録『祈りのかたち―中世南九州の仏と神』二〇〇六年

＊　先行研究など、栗林文夫氏（黎明館）・小瀬玄士氏（史料編纂所）にご教示いただいた。

（山家追記）講演後、東京大学史料編纂所の畑山周平・林晃弘両氏より、島津氏による住持任命書につき、類例含めて他にも事例のあることをご教示いただいた。これにより本講演録の島津氏による住持任命の個所はなお検討を要する。畑山周平氏「戦国期南九州の有力領主」（『戦国時代の大名と国衆』戎光祥出版、二〇一八年十二月）も参照されたい。